

## 2021年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	<b>継続される儒者の講義</b> — 明治前期の学校教育を手掛かりに —
キーワード	①藩儒、②師範学校、③教育実践

### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	イノウエ カイ 井上 快
配付時の所属先・職位等 (令和3年4月1日現在)	東九州短期大学 助教
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	東九州短期大学 助教
プロフィール	1991年生まれ。広島大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(教育学)。江戸時代の教育に関心があり、とくに藩校や塾で教育活動を行った藩儒と呼ばれる人びとについて研究しています。藩儒について研究することで、「教育」を教育者と学習者のコミュニケーションとして把握することが可能になると考えています。主要な研究業績として、「幕末期における藩儒の『孟子』講義—吉村秋陽・斐山に注目して—」(教育史学会編『日本の教育史学』第63集、2020年、6-18頁)など。

### 1. 研究の概要

明治維新によって社会は一変した。身分制度は崩壊し、庶民であっても立身出世を目指し、国家や政治へと参画していく時代が到来したのである。立身出世主義は学校教育にも反映され、「学制」では「学問は身を立てるの財本」という理念を掲げられた。

しかし、明治前期の近代学校を支えたのは江戸時代に生まれ育った教育者たちである。彼らは江戸時代に蓄積された知見や工夫を用いながら講義に臨んでいた。身分制度の維持を目指して考案された講義が、近代学校においても実践されていたのである。本研究では、近世から近代にかけて代々教育職を担った一族に注目することで、家業である講義が継承されていく過程を実態として描き出す。そして、教育実践と教育の最終目的との間に断絶が生じた状態で近代教育は始まっていったことを指摘する。

### 2. 研究の動機、目的

本研究の目的は、江戸時代の講義がいかに近代教育に継承されたのか、解明することである。江戸時代に講義を行った人物は種々挙げられるが、本研究では藩儒に注目する。

藩儒とは、藩に登用され、藩校での教育活動を担った人びとである。熊沢蕃山のように好学的な藩主によって早くから重用された例もあったが、その数が爆発的に増加したのは18世紀後半に入ってからである。当時は藩校の設立が全国的に相次いでおり、多くの藩儒が藩校教育に従事していた。また、藩儒のなかには藩校教育の傍ら、家塾を運営することも多かった。

藩儒の講義は身分制度の維持、再編を目指して行われた。本研究で分析対象とする広島三原藩儒は藩士や塾生に対して、身分相応を説いており、講義の内容も庶民層が分限を超えて政治活動に走らぬよう工夫されていた。藩儒は身分制秩序の枠組みの中での学問を再構成し、その内容を学習者に講義していたのである。

藩儒の中には明治維新以降の学校教育に動員される人物もいた。また藩儒の手ほどきを受けた後継者が教員となる場合もあった。彼らは師範学校での研修を経ることなく教員に任じられており、手探りの状態で学校教育に従事していた。この点は、先行研究で見過ごされてきた。本研究では、近代教育の担い手が藩儒の後継者であったことに留意し、藩儒の講義が近代学校に継承されていく過程を探求したい。

### 3. 研究の結果

本研究では、幕末の広島三原で藩儒をつとめた吉村斐山（1822-82）と、斐山の子で明治前期の師範学校教員をつとめた彰（1853-1908）を対象に研究を進めた。

斐山は、佐藤一斎の弟子として名高い吉村秋陽（1797-1866）の後継者である。広島三原で藩士育成に従事する傍ら、家塾咬菜塾を運営し、ひろく教育活動を展開した。彰は吉村家の三代目にあたり、明治前期、留正書院（もとの咬菜塾）や広島県尋常師範学校で教育活動を行っていた。

本研究では、彰の二つの講義記録を史料とした。一つ目の講義記録は『論語講義』と言い、明治23（1890）年より広島県尋常師範学校にて行われた『論語』の講義の記録である。そしてもう一つが、『論語講義筆記』と言い、明治15年から留正書院にて実施された『論語』の講義に関する記録である。

史料を分析した結果、明らかになったことは以下の2点である。

第一に、広島県尋常師範学校において彰は、佐藤一斎らの学説を引用しながら講義を進めていたことが明らかになった。一斎の学説の引用は留正書院における講義でも共通しており、吉村家の家学であったことが分かる。江戸時代以来の吉村家の家学は、明治前期の塾を経て、明治前期の尋常師範学校へと継承されていったのである。

第二に、広島県尋常師範学校における彰の講義は、秋陽の講義をそのまま引用していたことが明らかになった。『論語講義』の余白への書き込みであることから、補足として講義の合間に取り上げられたのかもしれない。ただし、彰が秋陽の講義を明治前期においても参照し、引用していたことは明白である。

以上より、広島県尋常師範学校における吉村彰の講義が、吉村家の家塾である留正書院における講義や吉村秋陽の講義を参考にして展開されていたことが明らかになった。ただし、元来、この講義は秋陽が江戸時代に考案したものであり、その最終目的は身分制度の維持にあった。しかし、秋陽が最終目的に据えた身分制度は明治時代には存在しない。庶民であっても立身出世を目指し、国家や政治へと参画していく時代が到来していた。秋陽の講義は近代国家の社会体制に沿うものではなかった。近代学校における講義と近代学校教育が目指す最終目的との間に断絶が生じた状態で近代教育は始まっていったのである。

### 4. 研究者としてのこれからの展望

すでに上で述べましたが、江戸時代には身分制度があり、社会階層によって修得すべき学問が異なりました。また出自によって学問レベルも異なりました。江戸時代の教育者たちは関心や学問レベルが異なる人びとに学問を教えなくてはなりません。もちろん当時は教員養成課程などありませんから、それぞれの教育者が、それぞれの学習者と向き合うなかで、講義を工夫していきました。先人たちが蓄積してきた講義の工夫をひとつひとつ具に拾い上げていきたいと思えます。

### 5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

学校教育の機能不全が指摘されて随分と経ちます。私が専門とする教育史研究は、そうした学校教育の機能不全の原因を、学校教育が誕生した明治時代、あるいはそれ以前まで遡って探求します。貴奨励金を得ることで、微力ながらもわが国の学校教育の淵源に迫り、その一端を探求することができました。ご支援いただきました関係者の皆様には、この場をお借りし、心より御礼申し上げます。